

病変が著明であることより Pseudoachondroplasia と診断した。Pseudoachondroplasia と Achondroplasia の鑑別を中心に若干の文献的考察を加え報告した。

14. Anterior sacral meningocele の1治験例

○佐々木孝, 竹内 孝, 村山憲太
吉野紘正 (国立習志野)
外間孝雄, 香村衡一 (同・泌尿器科)
伊藤文雄 (同・外科)
山根友二郎 (帝京大)

Anterior sacral meningocele は極めて稀な先天性奇形であり, 仙骨の前方欠損部より髄膜が突出したものである。症状は便秘, 排尿障害などの圧迫症状が多い。確定診断はミエログラムであるが, 仙骨の単純レ線像は特徴的である。治療は原則的には保存的に行うが, 手術は後方進入が勧められている。以前は術後髄膜炎による死亡率が高かったが, 化学療法の発達により減少している。

15. 国立静岡病院整形外科開設1年の歩み

○堀井文千代, 国井光隆, 大西正康
(国立静岡)

国立静岡病院整形外科を井上教授を始め大学及び静岡県在住の諸先輩の強力な御支援のもとにS52. 10. 15堀井, 国井, 大西で開設以来早1年を経過するが, 手術例数は四肢全域の骨折, 外傷, 脊椎外科, 関節外科と整形外科全域にまたがり既にして100例に達す。今回の例会で我々が一年間を通じ経験した症例中特に興味を持った症例或いは症状の劇的改善を見た9症例を報告し諸先生方の御批判を迎ぎ今後の糧にしたいと思う。

16. 当教室における三角筋拘縮症の治療成績

保坂瑛一, 渡部恒夫, 宮坂 斉
大塚嘉則 (千大)

過去3年間における三角筋拘縮症の手術例9症例の予後調査を行った。手術施行時平均年齢は12歳2ヶ月, 平均過観察期間は1年2ヶ月であった。外転拘縮の指標として正面レ線像における肩甲外側縁と上腕骨軸とのなす角度を計測し, 手術後, 平均15°の拘縮寛解を確認した。健側と比較して拘縮残存度は6.7°であった。肩甲骨固定位における肩関節水平内転制限が術前拘縮の強かったものに多く残存する傾向を認めた。

17. 点滴漏出後におきた高度上腕二頭筋拘縮症の1治験例

○柳生陽久, 石田三郎 (桜が丘育成園)
上原 朗 (袖が浦療育園)

点滴, 漏出, 感染の経過をへておきた高度上腕二頭筋拘縮症を経験したが, 治療過程で, さく状の fibrosis は十分に切除した方がよい点, また急激な矯正には, 末梢循環障害・末梢神経麻痺を考慮することが大切な点, この症例では手術創の Keloid の治療が大変困難で今なお問題を残した点に注目して報告した。

18. 教室における内反足外来の現況と難治例について

○中川武夫 (千大)
山根友二郎 (帝京大)

先天性内反足57例83足を対象に治療成績, 難治例につき検討した。年齢は1ヶ月より10歳11ヶ月, 男35例, 女22例である。保存治療例は22例21足, 手術例35例52足で後内側離断術を行なった症例に再発が少なかった。成績は3歳以上の30例44足につき判定し優26足, 良13足, 可5足であった。難治例では麻痺性内反足の要素, 内旋位歩行, 下腿筋萎縮等が問題であり外見的類似性にとられない各症例ごとの検討が重要と考えられた。

19. 腓骨部分欠損による足関節外反変形に対する2治験例

○上原 朗 (袖が浦福祉センター)

腓骨下端部の部分欠損による足関節外反変形2症例に対する治験を述べた。第1例は, 11歳男子, 先天性で, 第2例は, 10歳男子, 後天性 (骨髓炎+外傷) の外反変形であるが, 年長児の為, 骨性に手術を行なった。第1例の扁平足とO脚に対し, 足根骨矯正術と脛骨骨切術のあと外反変形に対し, できるだけ下端での脛骨楔状骨切術を施行, 良好な矯正を得た。第2例に対し脛骨骨切りの4年後に再び悪化したため, 汎関節固定術施行し, 良好な矯正を得た。

20. 当教室におけるペルテス病の治療成績について

西山 徹, 村田忠雄, 中川武夫
木村 純, 栗原 真 (千大)

ペルテス病の長期経過例として平均16年を経過した, 10症例14関節, 短期経過例として, Tachjian Trilateral Socket hip abduction apparatus を装着して平均5年を経過した, 6症例6関節を, 直接検診し, catterall の分類に従って検討した。①骨釘移植術が保存的療法より